
乱世に咲く紅桜

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乱世に咲く紅桜

【Nコード】

N9377Y

【作者名】

三月語

【あらすじ】

少年は老婆を庇い死んだ・・・はずだった。目を覚ましたその場所は、平成ではなく戦国時代。しかも、自分が知りうる戦国時代とはまた違うもの。

乱世に跳んだ紅桜は、その世を如何に生き残るのか。

序幕 紅桜、戦国乱世に跳躍す

(・・・終わったか・・・、俺の人生も・・・)

トラックが迫る。そのトラックの主は少年に気付いていない。居眠りをしているからだ。

そして少年は、トラックの前に命懸けで飛び込んでいた。

「・・・いい加減、高校に処分を食らいそうだな・・・」

午後5時30分。少年は一人商店街を歩いていた。彼の名は『鬼頭桜也』。何故彼が処分を食らいそうなのか。それは数分前のことだ。

一人の中学生が多数の高校生にカツアゲされていたのを助けるために喧嘩を起こし、全員を再起不能にしまったのだ。それが一番の問題だ。

「・・・まあいいか。あの中学生を救うことが出来たんだ。気分もいってモんだ」

彼はすっきりした顔で、いい気持ちで歩いていた。

そして交差点に差し掛かった時だった。彼の目に、買い物袋を片手に横断歩道をゆっくりと歩む老婆の姿が映った。

「・・・あのおばあさん、大変そうだな・・・あれは!？」

そして桜也が見たのは赤信号なのに速度を落とす様子が見られない大型トラックだ。

「あのままだと・・・マズい!人身事故ひき逃げコースまっしぐらだ!・・・間に合え・・・!!」

老婆の危機を悟り、その横断歩道まで一気に駆ける。

そして桜也はおばあさんを突き飛ばし、自分が直撃コースに入ってしまった。

そして、冒頭に戻る。

(尽きたか・・・俺の運命も・・・。しかし・・・自分で言うのも
なんだが・・・いい生き方をした・・・)

徐々に迫るトラック。それが目前に迫った時。

「・・・この人生、悔いはねえ・・・」

そして、ドン、という音が鳴る。辺りから悲鳴が聞こえる。

桜也はトラックに撥ねられ、下敷きになる。

そしてそのトラックが通ったその後……

桜也の体はなかった……

(・・・ここは・・・？やっぱり俺は・・・死んだのか・・・？だ
としたら・・・ここは・・・地獄か・・・)

体が痛む・・・という感じはしない。トラックに撥ねられたのに、
だ。

「・・・俺も、地獄の閻魔によつやく会つてのか・・・。へっ、悪くねえな・・・」

目を開けて、起きあがる。しかし、おかしい。

「・・・何だ？地獄にしちゃ・・・風景がすっかりしてるな・・・。それに・・・城が見える・・・？」

そして、異変に気付いた。

(違う、ここは自国じゃない！もしかしたら・・・俺は・・・俺はタイムスリップをしたのか！？ここは・・・きつと昔の日本！城があるということは・・・室町か戦国時代！俺が轢かれたのは位置的には尾張・・・織田の御膝元か・・・)

一瞬で結論を叩き出した桜也は立ち上がり、城を仰ぎ見る。

「・・・こんな所でグダグダしているわけにはいかないな。とりあえず、情報を得るために城下町に行くか」

桜也は城に向けて歩み始めた。

『義賊の紅桜』、乱世に降臨す。

時代の知識を持ったこの男がいかに乱世を生き残るのか。そして、
どんな出会いを果たすのか。

その時はまだ・・・

神のみぞ知る、としか言えない。

序幕 紅桜、戦国乱世に跳躍す（後書き）

ということ、現愛知県・・・尾張へと跳びました。私の地元だったら美濃が飛騨が本元なんですが、やっぱりそれに近いところでしかも有名な尾張で。

どうなるかは楽しみに、ということ。

今回は・・・出ます。「あの人」が・・・とはいえ、まだ元服済ませてないですけど。そして『紅桜』が本格的に動きます。

一幕 紅桜、吉法師と相見える（前書き）

一幕です。ようやく主要人物が一人出ます。タイトルから・・・分かってください、誰かを。

一幕 紅桜、吉法師と相見える

「……ここが尾張なら、あの城はきつと那古野城か？いや、違うか……？とにかく誰か人を見つけないと……」

桜也はひたすら城下町を目指して歩いていた。ただ、歩いていたらめ時間はかかる。

そして、川沿いを歩き始めた時だった。

「せいっ！」

「うわっ！」

二人の声とドスン、という音。

(……近くで相撲でもやってんのか？それとも柔道？)

川沿いを歩いていて聞こえてきた音。推測できるのは相撲。

「くっそー……やっぱり強いですよ吉法師様……」

「あたしに勝とうなんてまだまだ早いよ！もっと実力をつけてくるのだな……！」

「まだ！もう一回……！」

(・・・吉法師・・・?)

聞いたことある名を頭の中で反芻する桜也。そして愕然とした。

(待て、吉法師って信長の幼名だぞ!?!?というか女!?!?信長が女だと!?!?)

混乱。桜也が知っている信長は男。しかし、今相撲をしている少女は吉法師と呼ばれた。吉法師は信長の幼名。つまり彼女が信長、ということだ・・・

「・・・誰だ!」

「っ!」

混乱にどうすることもできず立ち尽くしていたその時、吉法師が桜也を見つけた。

(・・・しまった、見つかった!)

「・・・む?お前・・・なかなか変わった服装をしているな。何処の者だ?」

(・・・下手に『未来人です』とか言うのはマズい・・・!なら誤魔化すか・・・!出来るだけ昔の言い方にして・・・)

とっさの判断で誤魔化すことを決定した桜也。そして彼が口にしたのが・・・

「生まれ故郷は忘れた。俺は行く先無く流離う風来坊故・・・」

「・・・ほう・・・名は？」

「・・・鬼頭、紅桜」

この瞬間、
『鬼頭
紅桜』
が誕生した。

那古野城では・・・

「吉法師様がいない!!」

「またいつもの外遊びだ。まったく、そろそろ次期党首としての自覚を持つて欲しいものだ・・・」

「し、しかし政秀様・・・」

「問題ない。吉法師様はまた無邪気な笑顔と共に帰ってくるさ」

いつものことだ、と部下の狼狽を制するこの男は後の信長・・・今は吉法師の教育係の平手政秀だ。吉法師の行動はいつものことだ、そろそろ自覚を持つて欲しいと呆れて言っていた。

「・・・鬼頭紅桜？聞かぬ名だ」

「放浪していた故、聞くはずがないだろう」

「それもそうだな・・・。紅桜といったか？」

「・・・何だ？」

「少々こいつらとの相撲も飽きてきた、お前と一度勝負がしたい！」

吉法師は紅桜に宣戦布告をした。

「・・・俺としては丁重に断らせてもらいたいのだが・・・」

「何故だ！」

「女子と戦う、というのは少々気が引けるのでな」

紅桜の本来の意思は『弱気を助け、強きを挫く』。相手が強かろうと、女子なら『弱き』に分類している。それが今の紅桜だ。

「あたしをそこらの女子と一緒にするなよ？」

「・・・そこまでの自信があるなら・・・いいだろう、受けて立つ」

吉法師の挑発に敢えて乗った紅桜。

「どうぞ、禪です」

「・・・いや、いい。このままでやらせてもらおう」

「あたしを馬鹿にしておるのか？だとしたら・・・その余裕、打ち砕いてくれるわ！」

お互いが輪の中に入り、構える。

「はっけよい……のこつた!!」

少年が号令をかけたその瞬間だった。

パンー!!

「みゃうっ!?!」

紅桜は吉法師の目の前で拍手を打つたのだ。つまりは猫騙し。当然吉法師は驚き、可愛らしい悲鳴を上げる。

「はあっ!!--」

「わ、わっ、きゃうっ!!--」

そのまま上手投げを決めた。秒殺とはまさにこのことを言う、といつても過言じゃないくらいだ。

「う……うう……」

「……これが俺の実力だ」

「ま……まだ負けたとは言っていない!それにあれは反則だ!目の前で拍手を打つなど反則だぞ!!」

「(……そうか、そういえばまだこの時は猫騙しはルールに入っ

てなかったのか)・・・分かった、今度はそれを使わないでおこう
「絶対だぞ!!!いいな!」

そうして吉法師と紅桜の二戦目が始まった。・・・が。

「ふみゅっ!」

秒殺一回目。決まり手は蹴返し。

「わきゃうっ!」

秒殺二回目。決まり手は内無双。

「ふええっ!」

秒殺三回目。決まり手は一本背負い。・・・ここまで来ると清々しいほどに強かった。周りの少年たちも、

「あの紅桜って人・・・吉法師様を一回も勝たせないでいる・・・
凄い・・・」

「あそこまで強い方が、何故士官なさらないんだろう・・・」

等と驚愕と称賛の声を上げていた。

「きゃん!!」

そして通算一九回目の秒殺が決まった時。

「……これくらいにしてもらえないだろうか？そろそろ良心の呵責を感じるのだが」

「ま……まだ負けたなどと言ってない!!あたしはまだ負けておらぬ!!」

「……しかし、これ以上続けるのは流石に不味いと思う。あちら

を見る、陽が暮れ始めている」

「う……」

西を見ると、陽が山裾に隠れ始めていた。

「今日は帰られよ。俺は何度でも、そなたの相手をし続けよう」

「う……！ぜ、絶対！絶対だから！一度でもお前から勝ちを奪ってみせるからな……！」

吉法師は少年達を引き連れ、帰っていった。

「……久しぶりに相撲をしたな……。まさか猫騙しがあそこまで通用するとは思わなかった」

紅桜はその場に残り、そう呟いた。

「……さて、俺もそろそろ城下町で宿を探さないと。途中で御尋ね者でも捕まえられたら御の字だが」

城下町へ向けて再び歩を進める紅桜であった。

なお、途中で御尋ね者を見つけ、襲うつもりのそいつらを返り討ちにして逆に金を得てしまったのは余談である。

那古野城。

「吉法師よ、今日は荒れているな。何かあったか？」

「父上！荒れたくもなる！今日会った紅桜という流浪者に相撲を挑んで全敗したのだから！」

「・・・ほう、お前を負かしたのか。是非とも顔を見てみたいものだ」

「信秀様、そのような流浪者に会う等以ての外ですぞ！！」

家臣に諫められる吉法師の父であり尾張の古渡城主・織田信秀。彼は今、娘の吉法師のことを見るために那古野城へ来ていた。

「長秀よ、そ奴は吉法師の無理矢理な挑戦を快く引き受け、負けず嫌いなこ奴の連戦をも引き受けてくれたのだ。普通ならばここまでしてくれることはあるまい？」

「それは・・・そうですが・・・」

「それについては翌日決める」

「はい、承知致しました」

長秀と呼ばれた男は襖を開けて部屋を出た。残ったのは信秀と吉法師。

「吉法師・・・いや、『姫香』よ」

「何でしょうか、お父様？」

「お前の目から見た紅桜という者、如何様な者か？」

信秀は吉法師・・・いや、「姫香」と呼ばれた少女に改めて問い正した。

「私の目から見た紅桜は・・・やはり強いということとは否定しません。ですが・・・その強さの中に優しさがある、そう見ました・・・」

「

「・・・ふむ、お前からしてそのような言葉が聞ける紅桜とやら、是非とも召抱えたいものだな」

このような会話が、那古野城でされていた・・・

「すみません、ご老侯。無茶を聞いてくださり、光栄の上ありませぬ」

「構わぬよ。こちらとて盗人を捕らえて奪われたものを取り返してもらったのじゃ、これくらいの礼はさせてもらわねば罰が当たるわい」

「では、お言葉に甘え、一宿一飯、させていただきます」

紅桜は城下町で早速盗人を撃退し、盗品を返した時にそのお礼として老人の家に泊めてもらっていた。

(明日は・・・城を見に行くかな・・・。それにしても・・・吉法師・・・いや、後の信長か。まさか彼女がそうだとは思わなかった・・・)

彼はこの日の劇的な出会いを反芻し、そのまま眠りに着いた。

一幕 紅桜、吉法師と相見える（後書き）

次回はさらにもう一人出会います。タグにある通り史実改変がありますので。

感想、待ってます。

二章 紅桜、織田家に登用され新たに少女と相見え（前書き）

一気に進む気がした第二話です。紅桜がついに織田家に登用されま
す。・・・ついに、というのもおかしいですけど。

後書きで、史実相違点を上げておきます。

二章 紅桜、織田家に登用され新たに少女と相見え

翌朝。信秀は動いた。娘・吉法師を負かし彼女の眼からも良い評価が得られた『紅桜』という男を家臣として召抱えるため。

そして城下町はその家臣が『紅桜』を探し求めて歩きまわっていた。

そしてその家臣らは、紅桜が一宿させてもらった家にも来たのだ。なお、紅桜はとうにその家を出てしまっていた。

「ご老人、『紅桜』という男を知らぬか？」

「紅桜・・・ああ、昨日一晩泊めてやったわい。朝方すぐに出ていってしまったがの」

「左様か。して、何処へ向かったかは？」

「流石に儂はそこまで知らぬよ」

「……尾張、か。まさかここに来てしまうとは夢にも思わなかった。……というか来るなんて思うわけがないと思う」

一方の紅桜は城下町が何やら騒がしくなったため、外に出て様子を見ていた。昨日野党返り討ちをして得た金で団子を食べながら。

聞こえてくる声は『紅桜殿！何処におわすか！！』や『紅桜殿の所

在を知る者はおらぬか!？」など。

「・・・どうやらこの領主・・・確か・・・織田信秀公だったかな?その人に気に入られたんだろ?うな。娘を負かした、ということ
で」

紅桜はそう言って立ち上がり、必要分だけ銭を払ってそこを後にしたその瞬間だった。

「あーっ!」

「・・・ん?」

聞き覚えのある声が聞こえた。昨日何度も聞いた声が。

「見つけたぞ、鬼頭紅桜!父上がお前を探しておる!共に城に来い
!!!」

そこにいたのは吉法師。昨日散々負かしたので復讐に来たのか、と思っていたら、そうでもなかったらしいと悟る。

「探している?領主殿が私如き流浪人を?」

「そうだ!父上に昨日の事を話したらお前のことを大層欲したからな!」

「・・・やれやれ・・・。領主殿がこれほどの博打を行うとは予想だにしなかった」
「いいから来い！」

吉法師はぐつと紅桜の手を引くとそのまま引き摺るように走りだした。・・・なお、紅桜は普通に走っていた。

「父上！紅桜を連れて来たぞ！！」

連れてこられたのは那古野城。・・・の中。そして領主の前。

（・・・まさか一気にここまで連れてこられるとは想定外だった）

「・・・ほう、そなたが紅桜と申す者か」

「お初にお目にかかります。我が名は鬼頭紅桜、君主に使える事無く流れる流浪者でございます」

紅桜は当初吉法師と会った時と同じように古めかしい言葉を用いて
恭しく挨拶をする。

「我が名は織田信秀。本来ならば古渡城を預かる身である」

「それは承知しております。して、何故私を召抱えようかと？」

素直な疑問を信秀にぶつける紅桜。

「吉法師から昨日の事を聞いてな。なんでも、吉法師の我儘を聞き、何度も相手をしてやったそうだが？」

「真にございますれば。吉法師様は当初、偶然付近を歩んでいた私めに「相撲で勝負だ」と仰られ、挑まれた矢先、退けば恥となると思ひまして、勝負に乗った次第でございます。手を抜かずにしたのは、逆に手を抜くのは吉法師様に対して失礼かと思ひますれば」

（・・・ほう、この男、中々どうして、出来る男ではないか。手を抜かずにいたのは、吉法師の心を傷つけず、それでいて満足させるため。・・・優しさも併せ持つ男は、今の世早々おらぬものよ）

信秀は淡々と喋るだけの紅桜を見て、彼の本質を見抜いていた。

「紅桜、当初申していた通り、お主を召抱えたいと思うのだが・・・如何か？」

「本来ならば召抱えると既に決まったもので言うものを・・・何故私目如き若輩者にそのような優しいお言葉を？」

「・・・さすがに、不審を持たれてもおかしくはない。そなたを心底欲しいと、召抱えたいと思った、ただそれだけよ」

「・・・なるほど。・・・ならばこの若輩、尾張領主織田信秀公に誠心誠意、お仕えいたしましょう」

紅桜は尾張の織田に仕えることを決めた。ただ、仕えるのは織田というより信秀に、であった。

「ところでそなたは・・・勉強は如何程か？」

「勉強は、それなりには学んでおります。しかし、他者に教えるほ

どの学は持ち合わせてはいないと」

「少々でもあればよかったのだ。そなたには吉法師ともう一人、合わせて二人の勉学の師となって欲しいのだ」

「・・・私めが、ですか？少なくとも吉法師様には教育係がいらっしやるのでは？」

「平手政秀の事だな。確かにあ奴は吉法師の教育係。しかし、あ奴だけでは吉法師を抑えることはできんだ。それに、吉法師を助けた事のあるそなたならば吉法師の歯止めとなろう」

「・・・されば、謹んで拜命させていただきますしよ」

こうして紅桜は吉法師とまだ誰かは分からないもう一人の勉学担当となったのだった。

「まさかお前があたしの師になるとは思わなかったぞ」

「俺も思わなかった。仕えるというのは想定していたが。それでも
う一人について教えてもらいたいのだが」

「ああ、そういえば伝えてなかったな。もう一人は竹千代だ」

「・・・竹千代？・・・もしかしたら松平家の・・・」

「よく知っておるな。聞こえは悪いが、竹千代は織田の人質だ。・・・
まあ、あたしにとってしてみれば妹のようなものだがな」

吉法師に連れられて竹千代がいるという部屋に向かう紅桜。

「紅桜！後で勝負だからな！！絶対だぞ！！」

「承知した。しかしその前に勉強が優先だ」

「う・・・」

吉法師ははつきりと嫌そうな顔をした。

「政秀！政秀はおるか！！」

「此処におります。・・・おお、そちらの方が吉法師様と竹千代様の勉強の師とられた・・・」

「鬼頭紅桜にございます。平手殿、新参者の若輩の身ではありませんが、何卒宜しくお願いいたします」

「親切丁寧な挨拶痛み入ります。私は平手政秀。吉法師様と竹千代様の教育係を仰せつかっております」

互いに挨拶を交わす紅桜と政秀。その横には大人しめな女の子がいた。

「竹千代、お前も何か言ったらどうだ？」

「・・・」

「竹千代！何を呆けておるか！！」

「えっ！？え、あ、そ、その、は、初めまして・・・。ま、松平・・・」

・竹千代と申します・・・」

今まで何に呆けていたのか、竹千代と呼ばれた少女は緊張した様子で、最後は顔を赤くして言う。

「一体如何した？政秀には直ぐに名乗れたお前が紅桜相手に直ぐ名乗れないとは」

「そ、それは・・・その・・・」

竹千代は言えなかった。まさかたったあの一瞬で見惚れてしまったなどとは。

「とにかく、あたし達の勉学の師となる紅桜だ」

「鬼頭紅桜と申します。以後、お見知り置きを」

「こ、こちらこそ、宜しく願います・・・」

こうして紅桜は松平竹千代・・・後の徳川家康と出会った。

だがこの出会いが・・・

本来彼女が歩むべき未来を大きく変えてしまうとは、このとき誰も
が知る由もなかった・・・

二章 紅桜、織田家に登用され新たに少女と相見え（後書き）

今回の史実相違点です。大雑把に言うと、大体が相違点になります。

家康（現時点竹千代）が信長（現時点は吉法師）とほぼ同い年

（既に分かっていると思いますが）信長・家康の性別が逆転している

なお、これに影響する形で数名武将が史実と大きく離れます。

今回はある平和な一日と、その平和が崩落するきっかけを。

お楽しみに。

三幕 或る平和な一日と・・・(前書き)

今回は日常編です。吉法師や竹千代に振り回される(?) (紅桜をお楽しみください。

最後にちょっとだけ今後の動きが分かります。

三幕 或る平和な一日と・・・

戦いも無く、平和な日々が続いている尾張。付近諸国の大名もそれといった動きを見せてはいない。

そんな尾張は那古野城。そこのある一日を覗いてみよう。

明朝。紅桜の朝はやけに早い。本人の癖と言えば癖なのだが、それがより悪化した……としか言いようがない。

「……時間的に見りゃ……明朝5時くらい、か……。今の時代じゃ……寅卯……とでも言えばいいか？」

たまたま持っていた（飛んだ時何故か合った）時計を見て改めて時間を確認する。……この時計、何故か時間が狂っていないのだ。一時期それが不思議で仕方がない紅桜だったが、敢えて気にしないことにしていた。

「……さて、そろそろ時間的にも……」紅桜!!」「」

予想通り、と言った感じで、突然襖がシパアンという軽快な音と共に開いた。吉法師が部屋に入ってきたのだ。

「・・・吉法師様・・・朝早くからいきなり飛びこまれても・・・」
「吉法師で構わんと何度も言っているだろう！それに余所余所しいのも無しでいい！！それより紅桜！朝稽古だ！」
「・・・朝稽古？」

何を言っているのやら、という感じで紅桜は吉法師に問う。

「決まっているだろう！朝稽古だ！こういうものは日頃の積み重ねが一番なのだぞ！！」
「・・・承知した」

渋々、といった形で部屋を後にした紅桜は、ぐいぐいと引っ張る吉法師に引っ張られたまま、庭へと出た。

「あ……吉法師さん、紅桜様、おはようございま……へくちっ
！」

「竹千代……お前それでも武家の娘か？」

「あ、朝早くで寒くて……くちゅん！」

庭には既に先客がいた。その先客は竹千代。朝早く肌寒い時期だったためくしゃみを連発していた。

「……まったく。情けないな、竹千代は。そうは思わんか？紅桜」
「情けないも何も……いくら武家の娘とはいえ、年頃の女子。そのところは致し方ないのでは？」

「むう……確かにそれもそうだな……。ならば……紅桜！今からあたしと朝稽古だ！！！」

「……了解。竹千代殿は御身体冷やさぬようにあちらへ……」

「は、はい・・・くしゅん！」

また大きなくしゃみをしてできるだけ冷えないような位置に向かう竹千代。

「今度は負けぬからな、紅桜！」

「・・・簡単に負けるわけにはいかないみたいだな」

お互いに木刀を構え、対峙する。

「・・・はあっ!!!」

先に動いたのは吉法師だ。・・・が。

「動きがあまりに単調。そのままでは当たる攻撃も当たらぬぞ」

「ま、まだまだ!!!」

「はー・・・」

かなり大振りで木刀を振るう吉法師を相手に、紅桜は簡単な動きだけで避ける。その動きはほんの少しだけ。

それを見ている竹千代は、思わず感嘆の声を漏らした。

「わああっ!!このっ、このおっ!!当たれ、当たれっ!!」
「動きが乱雑になってきているぞ。焦りは禁物だ、落ち着け」
「避けるな!一度くらい当たれ!」

吉法師はさらに大振りに、雑に動き始めた。

「……はあ……。一旦終わりだ」
「みゅっ!」

大振りを避けたその隙に木刀で軽く吉法師の頭を叩いた。

「い、痛いぞ!」
「落ち着けと申したはずだ。焦りは全てを見失う元になる。竹千代殿、一度どうかな?朝稽古として体を動かしてみるのもまたいいものだ」
「あ、あの、私は……」
「い、嫌だ!紅桜、もう一度、もう一度だ!まだ参ったなどと言っていない!」

必死に食らいつく吉法師。まだ目にはやる気が満ちていた。

「……仕方がないな。参ったと言うまで、何度も相手をしよう。」

それでも？
「構わん！」

何にもなかったかのようになり、再び木刀を構える吉法師。
紅桜も同じように構える。

「はああっ！！」

「最初から動きが乱雑だ。落ち着けと言っているだろう？」

「一度くらいは・・・一度くらいは当ててやるっ！！」

「・・・まったく、落ち着けとあれほど言っているだろうが」

「きゃうっ！！」

「あ、あの、紅桜様、そんなに頭を叩かれるのは良くないかと・・・」

また大きな隙を作った吉法師の頭をぽかんと軽く木刀で叩いた紅桜に、竹千代はちよつと意見をした。

「ただ諭すだけが無理ならば、行動を起こす。これが最善な場合もある、ということだ」

「は、はあ・・・」

なんとなく納得してしまう竹千代。しかしそれにも理由がある。説得力があるからだ。

「どうする？休憩を取るかまだ続けるか」
「まだやる。集中すればいいのだろう？」

今まで明らかに雑な動きしかしていなかった吉法師が、雰囲気を変えた。集中をしている証拠だ。

「はっ！」

そして、剣を振るった。今迄とは明らかに違う動きで。

(・・・動きが変わったな。集中している・・・。気を抜いたら俺が「参った」なんて言わされそうだな)

「はっ！・・・はあっ！たあっ！！！」

剣閃が鋭くなつた木刀を受け流すように木刀で弾く紅桜。

「本当に・・・動きが良くなった・・・」

「これが・・・ふっ！集中している時の動きだ・・・！」

変わらぬ剣閃を同じように弾き続ける紅桜。顔にあった余裕の色が消え失せていた。

「……が、まだ隙がある！」
「……しま、きゃんっ！！」

しまった、と言い終わらないうちに吉法師は空中で一回転し、尻もちをついた。

「ま、参った……。あたしの負けだ……」
「……ふう」

漸く吉法師が降参だ、と言ったので紅桜は一息ついた。それと同時に。

「あ、あの、吉法師さん、紅桜様、お茶を用意しました」
「すまないな、竹千代殿。まるで女中のような事をさせてしまった」
「いえ、その、私がやりたくてやったことなので……」

顔が赤くなっている竹千代。それを見ていた吉法師は……

(……紅桜のやつ、竹千代に惚けよって……。！少しくらいあたしに目を向けてくれてもいいだろう！？それなのにあたしにはいつも頭を叩いて、竹千代には頭を撫でて……。！……。何なのだ、このもやもやした感じは……。？あれを見ていると無性に腹が立つ……。！)

気付いていないが、頭を撫でられ、恥ずかしそうに、でも嬉しそうにされるままになっている竹千代に嫉妬していたのだった。

朝食を済ませ、紅桜は政秀と共に歩いていった。

「申し訳ありませんな、鬼頭殿。吉法師様の朝稽古は本来なら私が相手をせねばならぬと言うのに」

「気にすることはありません。第一、吉法師様が私の寝所の襖を盛大に開け放ってくれましたから、平手殿は何も悪くはありません」
「そう言って頂けると気が楽になります」

政秀は苦笑しながらも感謝の言葉を告げた。

「しかし、平手殿も大変だとつくづく思う毎日で」

「そうですね？・・・確かに、吉法師様の「うつけ」には毎度困らされておりますが」

「・・・確かに」

お互い苦笑いしながら同じ部屋に向かっていった。

「遅いぞ政秀、紅桜！早く始めろ！日が暮れるだろう！？」
「はいはい、少々お待ちを」

政秀は吉法師に急かされて書物を取り出し始めた。

「紅桜様、お手柔らかに・・・お願いします」
「了解すれば」

紅桜も竹千代と1対1での勉強を開始した。

「・・・で、先日は何処まで進めたか・・・」

「ええと・・・加減乗除は改めて済ませて・・・ええと・・・」

「細かい範囲での乗除だな、確か」

「え、ええ、はい、そうですね」

なんとなく挙動不審な所をたまに見せる竹千代に疑問を抱きつつも進める。その横では・・・

「だから言っているだろう！？まずは攻めねば話にはならぬと!!」

「攻めるばかりでは勝てる戦で負けるものですよ」

「それも力でねじ伏せれば良いではないか!!」

そして吉法師が声を荒げていった時、紅桜は立ち上がった。

「少々失礼」

「は、はあ・・・あ、あの、それは・・・?」

「仕置き用の道具だ。それ以外の事は言えぬ」

手には・・・白く段状に折られ、手元を一つに纏めた紙のようなものを持って。

パンー！！
「ふぎや！？」

良い音を鳴らす勢いで吉法師の頭を叩いた。

「な、何をするか！！」

「何を戯けたことを言うか。戦において確かに「攻撃こそ最大の防御」と言う。だが、それでどうにもならぬこともある、ということだ」

「そ、そんなこと・・・！！」

「ある。例え一騎当千の武士がいたとしても、誰かを盾に取られて戦えるか？それが親しき者なら尚更だろう？」

「う、ぐ・・・」

見事に吉法師を論破してしまった紅桜。それを見た竹千代はただ「凄い」としか思うことしか出来なかった。

「・・・ああ、竹千代殿。これはあなたにも言えること。間違っても力だけで勝てるとは思わぬように」

「は、はい！」

不意に話をふられ、大慌てで返事をした竹千代。その声は裏返っていたと後に政秀は語った。

昼食を済ませ、庭でぼーっとしている紅桜。

（大きな戦いも無く平和だな……。でも、そろそろ戦いもあってもおかしくない頃、何時お呼びがかかっても平静を保てるようにし

とかないとな)

庭を何の気なしに眺めていたら。

「あ……紅桜様、斯様な所にいらしたのですか？」

「……ん？ああ、竹千代殿か。吉法師様は？」

「政秀様を連れて街に。跳んでいくような様でした」

「……あの方らしい」

隣に立ちすくむ竹千代。

「……どうなされた、竹千代殿？隣に座られても構いませぬが」

「いえ、貴方様の隣でこうしていられるだけでも十分なのです」

思わぬ発言にさすがの紅桜如何しようも出来ず。

「……お好きになられよ」

「はい」

座って呆然と庭を眺める紅桜と、それをただ立っただま見つめる竹千代、という図が出来あがった。

夕食も食べ、入浴も済ませ後は就寝のみとなった時だった。

「鬼頭。少々いいか？」

「……信秀様？いかがなされましたか？」

紅桜の寢所にお忍びで信秀が来た。

「お前に伝えたいことがあってな。大事なことだ、大声で話すわけにはいかぬのでな」

「……では、こちらに……」

信秀を部屋に招き入れ、誰もいないことを確認して襖を閉めた。

「して、話とは如何なるもので？」

「……近いうちに出兵をするつもりということをおことうと思つてな。お前にも出てもらおうと思つてきた、ただそれだけだ」

「……吉法師様は如何なさるおつもりで？」

「……あれももうじき元服を迎える。それを過ぎてからのつもりよ、出兵は。今川と松平の連中は、また手を組んで攻めようとしてゐるという話を聞いたのでな」

（……ということは、第2次小豆坂の戦いが起こるのか……。待てよ、信長が女だつてことは、濃姫は妹になるのか？）

一瞬、そう考えつく紅桜。

「……そこに出兵なさる、ということとは、美濃の斎藤道三へは如何にするおつもりか？」

「吉法師を使者として出し、和睦を申し込むつもりだ」

やっぱりな、と思いを聞く紅桜。

「・・・さればまた、その日を待ちましようぞ。若輩者とはいえ、尽力いたします」

「そう言ってもらえれば心強い。では・・・頼むぞ」

そう言つて信秀は紅桜の寢所を後にした。

「・・・吉法師の話をしていた時の信秀殿の眼は・・・どこか寂しげな眼をしていたな・・・。まるで・・・」

一人の父親として、自分の娘を思いやり、死なせたくないという眼
だったような」

三幕 或る平和な一日と・・・（後書き）

今回の相違点です。なお、前回の連続したものがありません。

家康（竹千代）が既に織田寮にいる 本来は信長元服後に連れてこられる

だけですね。次回は・・・吉法師、元服！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9377y/>

乱世に咲く紅桜

2011年12月8日00時54分発行